

第1回北九州市地域福祉計画策定懇話会 会議録

1 会議名 北九州市地域福祉計画策定懇話会

2 会議種別 市政運営上の会合

3 次題

(1) 地域福祉計画策定懇話会について

- ①懇話会の概要
- ②座長及び副座長選出

(2) 地域福祉計画の策定について

- ①次期計画の策定
- ②現行計画の進捗
- ③地域福祉に関する市民意識調査等の結果

(3) 構成員からの情報提供

4 開催日時 令和7年11月27日（木） 14：00～16：30

5 開催場所 北九州市役所5階 特別会議室B

6 出席者氏名

(1) 構成員（敬称略、五十音順）

大久保大助、川崎三英子、河津陽三、坂本規久子、遠山昌子、中間あやみ、藤原大樹、都城俊彰、
村山浩一郎

(2) オブザーバー（敬称略）

平野謙太

(3) 行政関係者

地域共生社会推進部長 田中直子、地域福祉推進課長 田津真一、地域福祉担当係長 吉武祐輝、
担当職員2名

7 会議経過（発言内容）

【議題1】地域福祉計画策定懇話会について

①懇話会の概要

北九州市地域福祉計画策定懇話会の概要について、地域福祉担当係長より説明

②座長及び副座長の選出

- ・座長：村山構成員
- ・副座長：大久保構成員

【議題2】地域福祉計画の策定について

資料2－1、2－2、2－3－1、2－3－2に沿って、地域福祉推進課長より説明

●主な意見・質疑応答

【都城構成員】

資料2－3－1の市民意識調査結果について、いわゆる向こう三軒両隣的な地域とマンションでは相当な差があるのではないかと思います。この調査の中に、住まいの形態を問う項目はありますか。

【地域福祉推進課長】

項目としてはありますが、資料2－3－1の中には住まいの形態ごとの分析は含まれておりません。ただ、データとしてはあるので、分析できる形にはなっています。分析すると結果が全然違ってくるのではないかと思います。

【村山座長】

集計の方法について、こういう形で集計・分析できぬいかという意見があれば、ぜひ事務局にお伝えいただきたいと思います。

【平野オブザーバー】

資料2－3－2 地域福祉団体アンケート結果の12ページについて、「関係団体」は注釈でNPO・ボランティア団体、企業、社会福祉施設、学生などの団体となっているが、これでクロス集計ができるのかということが1点と、関係団体に自治会や地区民生委員児童委員協議会、まちづくり協議会などは含まれないのかの2点について教えてください。

【地域福祉推進課長】

クロスはできません。

関係団体については、自治会やまちづくり協議会は含めず、民間の企業やNPO、介護保険の施設や学生のような団体としております。

【大久保副座長】

資料2－2 現行計画の進捗についての6ページ、NPO法人数の推移について、10年以上活動している他のNPOと一緒に、NPOの運営や考え方、理念についてや、コロナ以降の活動をどうしていくかの研修を実施していますが、新しいNPO法人の参加が少なく、既存の団体しか来ていない。肌感覚ではあるが、傾向として、昔は市民活動団体が活動の幅を広げるためにNPO法人を設立していたが、最近は色々な法人の中で、ビジネス的な視点で選んでNPO法人になるみたいな団体も増えていると感じます。ただ単に法人数が増えているから民間の活動がどうっていうのは、感覚としては、どうだろうかというのは疑問。NPOも質的な変容は大いにあると感じているので、数字だけ追ってしまうとちょっと危ないなと感じます。

【議題3】構成員からの情報提供

【村山座長】

ここでは構成員の皆さまの活動内容と、活動を通じての課題感や気づいた点をお話しいただきたいと思っております。自己紹介も兼ねて、活動紹介をしながら課題などをお話しください。

【中間構成員】

私が所属しているNPO法人抱樸は、八幡東区の荒生田に本部がある事務所でございます。1988年から活動を開始しているんですけれども、昔の法人の名前が、北九州ホームレス支援機構という名前で活動をしておりました。北九州市は、多いときで450人から500人ほど、野宿生活をされている方々がいらっしゃった時期もありましたので、そういう方々に対して、炊き出しの支援とか、家を借りることができない方々の住まいを確保する、そういうところのお手伝いをしたり、借金問題を抱えておられる方々の解決のお手伝いをしたり、ご家族との縁が切れておられる方々が非常にたくさんおられるので、なんちゃって家族ではないですけれども、これまで家族が担ってきた機能を赤の他人が担い合おうじゃないかということで、血縁関係はないんだけれども、家族がこれまで当たり前にやってきたことを、私たち抱樸の職員が代わりに行うとか、そういう互助的な、同じ経験をした人たちだとか、近隣に住んでいる人たちが、一緒に支え合うというそういう互助組織みたいなものもつくりながら、活動をしてきております。

当初は野宿の方々への支援からスタートした団体ではあるんですが、今では、子どもとその家族の支援とか、刑務所から出所する方とか、障害がある方、ご高齢の方など、非常に幅広く活動をしておりまして、今法人としては29の部署がございます。そのように、1人1人、出会った方々との関わりの中から、その方には何が必要か、その方には誰が必要かっていうことを考えながら、衣食住や医療などそういう物理的なものがない「ハウスレス」の状態と、人との繋がりがないだとか、一緒に喜んでくれる人がいないというような孤立した状態の「ホームレス」ですね、ハウスレスとホームレスは違うという、この2軸に対してきちんと支援していくんだということで、活動をずっと続けております。もう38年目を、迎える団体でございます。

個別支援に特化した取り組みをずっとしてきたところではあるんですが、いろいろなご縁あって、特定危険指定暴力団工藤会の本部事務所が小倉北区の神岳にございましたけれども、その跡地を抱樸が購入させていただきました。そこに「希望のまち」ということで、3階建ての施設を絶賛建設中でございます。2階3階部分には救護施設という生活保護上の施設で、どういった方でも制度上できちんと受けとめることができるというような施設を設けるんですけれども、単なる施設の運営をする場所ではなく、その場所を拠点としていろんな方々が立ち寄ってくださったり、一緒に生きていくことを考えたりできるような、そういうまちづくりをやりたいということで、最近は個別支援だけではなく、そのような地域づくりとかまちづくりにも挑戦をしているというような団体です。

あと私自身としては、重層的支援体制整備事業が、一昨年からスタートしていますけれども、現場では今その担当をしております。特に今年度からは社会福祉協議会と抱樸が共同事業

体として事業を受託させていただいておりまして、個別支援に強い抱樸と、地域づくりの部分で長年ご経験のある社協とが一緒にタッグを組みまして、両者のよさを活かし、この事業を通してきちんと貢献して、そして北九州が少しでも住みやすいまちになるよう、いわゆる包括的な支援、支援の網の目がちょっとずつ細かくなるような体制づくりができるといいなということで、そういういた事業も今現場では担当をしております。

そういういた取り組みを通して感じる課題感としてはやはり、単身の方々が非常に多くて、単身単身高齢の方がどんどんこれから増えてくるということは皆さんご存じの通りだと思いますけれども、やはり非常にそこも感じております。やはり野宿の方々の支援からスタートしているところもあります。ご家族との縁が切れていて、何かあったときに相談できる相手がいなかったり、ご家族にも相談ができなかったりっていう方々も非常に多くおられますので、そういう1人ぼっちの状態になられる方々が、これから先この世社会の中で生きていくにはどうしたらしいのか、最低限の生活を保障するだけではなくて、より豊かに、より人生を楽しく全うしていただけるような豊かな人生をみんなで歩んでいただけるようなまちだったり社会だったり仕組みをどうやって作っていったらいいかなっていうところは、課題として感じるところもあります。そういうふうにも単身者が多いというところもあって、これから先、ご高齢になっていった後の家じまいとか、入院のときの補償の手続きどうするとか、そういういたようなところも、支援の現場の中でいろいろ感じるところかなと思っています。単身高齢者もそうですし人ととのつながりも非常に弱い方々が多くなってきていますが、それでもやはり人ととのつながりが必要なものなので、何か社会の中で、どうやったらつながりを新たにつくれるか、例えばつながりを作ることのお手伝いが、こういう支援団体として、どうやったらできるかみたいなところは、模索しているというようなところでございます。

【川崎構成員】

私も民生委員として24年間地域で活動させていただいてますが、ここ3年（1期）は小倉南区の会長として、市の方では副会長という形で活動に関わらせていただいています。やはり民生委員もなったばかりの頃は、地域は、高齢者もそうですが、高齢で一人暮らし、身寄りのない方というのは本当に何人かだったのですが、現在ではやもう数え切れなくなるくらいになっています。年に1回調査をすると、家族がいても遠く離れていたり、子どもたちの支援を受けられなかつたりという方がたくさん出てきます。

先ほど中間構成員のお話しにもありました、やはり地域との関わりの希薄化を感じます。昔は、「あそこのおばあちゃんは今こうしてるよ」とか、私たちの活動に役に立つようなお話をたくさんしてくださいましたが、今はそれがあれません。そしてその世代の方たちが亡くなってしまって、次世代になると、横のつながりが過疎化しているのか、なかなか入り込めないっていう状況で、見守りと気付いてつなぐことが民生委員の活動の基本ですが、ちょっと踏み込まないといけないこともたくさん出てきています。身寄りのない方の終末に立ち会つたこともあります。20年の間には孤独死されてる方もいました。

担い手がなくなってきたが、地域には福祉協力員という方がいます。数多い高齢者を毎月民生委員だけで見守るというのはちょっと無理があるので、町内の一人暮らしの方たちは、

福祉協力員にお願いをして、月1回の会議の中で連携をとりながら、情報の交換をして見守りをしています。はっきりとこういうことを民生委員でやってますよっていうことはないんですが、民生委員を知らない人たちがまだまだいるので、広報活動をしていかないといけないっていうので、各区、趣向を凝らして、市政だよりに出していただいたり、5月12日が民生委員の日ですので、その日はPRをしたりしてますが、なかなか浸透していない現状です。

先ほど都城構成員が言われたように、マンションが多くなっていて、私たちの活動の中でも、戸建ての場合は、お隣の方がいらっしゃるか聞いたたら、電気がついてるからいると思うよという形なんですが、マンションになるとオートロックで入れなくて訪問しにくいくらいっていう現状が今のところ出ています。やはり自治会とか町内会、まち協、そういうところで連携しながら見守りをしていかないといけないんじゃないかなということで、社会福祉協議会の小地域福祉活動をしませんかという形で、地域に広げていってるところではないかと思います。

だけど民生委員としては、やはり基本は高齢者の見守り、1人ずつを見逃さないっていうことをやっているように、ささやかな仕事なんですが、細やかなところからするような形です。大きなことっていうのはなかなかできないんですけど、抱樸のような団体と、連絡を取り合ながら、手を貸してもらえるように、今は行政としか連絡を取り合ってないので、そういうことも頑張っていかないといけないかなっていうふうに思います。

民生委員っていうのは、私も最初のころに、高齢者の男性が朝7時ぐらいに「ちょっと来て。とにかく来て」と言うから行ってみたら、「背中が痛いんよね。湿布を貼りたいけど背中に貼れないからこれちょっと貼ってくれん?」っていうことがありました。本当に小さなことで頼ってもらえるありがたさ、迷惑さみたいなこともありますけど、そんな小さなことから喜んでもらえるっていうことが、長く続けていく秘訣なのかなと思います。

ある人は身寄りもなくて、主治医から余命宣告をされた方が、私と一緒に聞いて欲しいというようなことで、行政の方にも一緒に行ってほしいという話をしたときに、「いや、会長行かなくていいんですよ。そんなときは自分たちも行きませんから」と言われたんですが、やはり地域でつながっている私たちの絆があるので「私は行きます。何かあったら行政に相談しますからね。」ということをしたこともあります。その方は本当に1ヶ月くらいで亡くなられただんですけど、最後まで見てあげたということもありました。身寄りがない方というのを、今、全国的に問題にしていただいて、市の方も考えいただいているようですので、そういうところも頼りにしながら、私たちは細やかな活動ができればいいかなと思っております。

【河津構成員】

北九州青年会議所は、73年目的一般社団法人になります。現在メンバーは約180名で活動させてもらってる団体なんですけれども、基本的にはまちづくり、まちの課題を解決していくような団体です。

過去の大きい事業としては、わっしょい百万夏祭りの先駆けとなった、まつり北九州であったりとか、到津の森公園のサリーとランという象を連れてきたり、北九州ドリームサミットという中学校2年生を対象とした事業しておりました。

今年度のまちづくりとしては、関門プロモーションマークの作成や、青少年ではキッズチャレンジパークを今年で3回目の開催をさせていただきました。国際においては、先ほどの到津の森公園に連れてきた象の兼ね合いもありまして、スリランカ、台湾、韓国、モンゴルの4カ国と姉妹都市を締結して毎年交流をしております。

それ以外にも、わっしょい百万夏まつりのパレードの運営や、到津の森公園の動物サポートーの支援、またイベントの支援などをさせていただいておりまして、その事業を通じて、まちの課題とかを解決するのも1つなんですけれども、目的の1つとしては、人の成長の機会の提供ということで、1つ1つの各分野の課題を見つけ出して、議案を作成して、実施して、検証するまでを、1セットとして、人としての育成という面にも力を入れている団体です。

【藤原構成員】

私どもは八幡西区の則松、折尾駅から車で10分ぐらいのところなんですが、高齢者福祉事業を展開している事業所になります。法人としましては昭和55年、1980年にスタートしまして、初めは特別養護老人ホームの設立から始まりました。その後、施設の方で介護が24時間365日必要な方に向けてのサービスの展開と、在宅で生活されていらっしゃる皆様方へのサポートということで、ホームヘルプサービスであったりデイサービス事業でありましたり、ケアプラン作成のケアプランセンターを提供しております。

そのあと介護老人保健施設や特別養護老人ホームも4人部屋がスタートでしたが、時代の要請で個室化が進んで参りました、個室のユニット型の特別養護老人ホームもやっております。要介護状態になった方の受け入れが中心なっておりましたが、その1歩前から、地域で暮らしていらっしゃる高齢者の方とおつき合いできればということで、皆様方のお話の中でも出て参りましたけど、やっぱり一人暮らしになられたときに、今までご夫婦で生活していらっしゃったけど、配偶者の方が亡くなられて、お1人になられて、施設にいらっしゃる方もそうなんですけど、高齢者の方に不安なことをお尋ねすると、「明日の朝目覚めるだろうか」と。シンプルなんですけども、やっぱり夜の時間というのは、日中の時間と違う感覚をお持ちで。健康であっても、1人で暮らすことの精神的な負担があって、ルームシェアのような形で、誰かがいる中で生活を送っていただければまだ地域に住んでいただける方が多かったので、住宅型の有料老人ホームを最後に手がけさせていただいて、健康のうちから関わらせていただきながら、いよいよ365日体制になったときには敷地内の施設をお使いいただいて、特養の本部で看取りまでさせていただいておりますので、最後のときまで一緒に支えるというふうな形で展開しております。

地域の方に向けての事業は、やはり健康でお住まいいただきたいということで、健康な高齢者の方に健康づくりの支援とかいうことをしてきたんですが、平成の後半ごろから、私どもの住んでる地域が山を削って住宅地をつくった典型的な新興住宅地でして、当然山を削ってますので、坂が多くある箇所もあって、出てきた問題が買い物です。1つは私どもの施設の近辺にあった地元のスーパーマーケットが平成27年になくなりました、近隣のスーパーマーケット行くにもですね、私どもの自治区ではなかなか歩いて荷物を持って帰るのが困難で、自治会の方から何かいい手がないだろうかということで、地縁がありましたのでご相談をちょうだいし

ました。施設には公用車がありまして、朝デイサービスとかでお迎えに行って9時半ぐらいには大体車両も全部戻ってきますので、9時半以降、あるいは午前中に、近くのスーパーに買い物支援ということで乗っていただいて、お店までお送りして、また、帰るときにご支援するっていう形で、第1，3，5週目の奇数週に買い物支援をさせていただくことになりました。

当初はやはりいろいろ難しくて、1つは、どこのお店に行くかもそうだったんですが、一番近くのお店に行って、お店の協力を受けられたのでよかったです、タクシー会社ともめごとになりました。「客を取るな」と、ものすごく誤解を受けてしまって。私どもが地域課題に初めて介入した例だったので、そこら辺の押さえるべきところや、ネットワークのつくり方もわからず、自治会の方とも直にご相談して、直に店舗と話をつけながらやったので、そこに、従来あるサービスとの調整はしてなかったことで、タクシー会社ともめることになって、一時期に積極的にできない環境になってしまいました。それからいろいろありながら、2，3年で大体そこら辺の話がついてですね、今は店舗に送迎するという形でうまくさせていただけます。黒崎のデパートがあった時代はデパートも中に入れてたんですけども、今はもうなくなりましたので、今は近所のスーパーをメインでやらせていただいてます。

今年の4月からですね、同じ地域でやっぱり買い物が難しいということで、そちらは地域の団体の方が独自に買い物支援のグループを作られていて、葬儀社がマイクロバスを持たれてるので、そこに協力してもらっていました。ただ、マイクロバスを運転できる方が限られてくるようで、どうしようもできないということで、葬儀社が引かれて、次の葬儀社が1年間引き継がれたんですけども、そこもちょっとご負担になったみたいで1年で引かれるということで、廃止しなければいけないというお話がありました。それはやっぱり今までされてきた活動ですし、定期的に利用されていらっしゃった方もいるので、車両だけの問題であればそこは私たちの法人が埋めましょうということで、1，3，5週目は自治会でやっているので、間の2，4週目でいいですかということで、今させていただいてます。

やはり買い物については地域の中で暮らし続ける上での第1要件だと考えます。高齢者福祉事業をしていると、どうしても施設入所に直結するようなサービス対象者から考えます。地域に住めなくなれば私どもが受け皿になりますので、我々としてはその方がいいのかもしれませんけども、私どもは逆に地域の中で思いっきり楽しんでもらって、いよいよのときは私どもに最後任せいただけるという、この何ステップ踏めるかが豊かな彩りある高齢期を生きていたくということに必要じゃないかなというところで、買い物は地域の要ということで支援をしているところです。

もう1つは、私ども社会福祉法人ですので、社会福祉法の中に社会福祉法人としての、公益事業の定義もいただいているところですので、その責務があると常日頃考えております。その中で令和元年に、北九州市社協と社会福祉施設協議団体6団体で、地域における公益的な取り組み推進に関する協定というのを結ばせていただきました。この協定の中で、私が今、高齢者福祉事業協会というところに所属をしておりますが、そちらで校区社協と連携をすることをさせていただいております。校区社協から、こういうことで社会福祉施設の知恵を使いたい、人材を使いたい、あるいは一緒に参画して、地域問題を解決していただきたいということで、お声掛けをいただいて、一緒に参画するようにしております。私どもについては折尾西校

区と八枝校区の社協に入させていただいて、折尾西については、人材育成のところでウェルクラブと一緒にさせていただいている次第です。そういう意味では、高齢者福祉事業だけではなくて、地域に住まい続けるためには、生活のところと、あとは支える人材のところが必要かと思いますので、これも私どもの1つの社会福祉法人として、現在取り組ませていただいているところです。

【都構成員】

小森江東校区社会福祉協議会では、現在令和3年度から令和7年度の第1次小地域福祉活動計画を実施中です。4月からは第2次計画ということで、買い物支援をしながら、次は剪定や雑草を抜くとか、そういう生活支援のところに進めていきたいと思っています。買い物支援については、特徴的なのが、すみれそうという特別養護老人ホームと、ひかり工芸舎という障害者支援団体、こことの提携で取り組みをさせていただいている。その辺が非常に珍しいということで、広くあちらこちらに報告すると、「そういう団体をすんなり受け入れたのですか。」という質問は必ず出ます。私どものところは、税関の官舎がなくなり全部跡地になってしまい、そのままだとイノシシの遊び場になるので、ぜひ何かを設置していただきたいというのが、校区の要望でもありました。そこで最初に、特別養護老人ホームが建設をされました。普段から事業所の方々と懇親をとったりしていて、祭りのときには私たちも行くし、私どもの祭りのときにはお呼びするし、敬老会にも、車椅子の席を設けたりですね、そういう関係がつくられてきたので、小地域福祉活動計画をつくるときも、策定メンバーの依頼に対して、「良いですよ」とメンバーになっていただきました。

ひかり工芸舎はもともと別の地域にあったのですが、やはり地域からあまり理解されていないと言いますか。例えば、声がせわしいとか、認知症の方が徘徊して困るとか、そういうことがあって、すみれそうの上、やはり税関の跡地に移転したいというお話がありました。その時に、社協や自治会、町内会長会議だとか、あるいは小学校のPTAも入ってもらっての説明会がありました。その時にはPTAの関係の方から、送迎の車に子どもがはねられるんじゃないかなというふうな心配もありましたけれども、小学校の障害教育の意味でも、ぜひ引き受けてあげようじゃないかという形で、これもすんなりいきました。

そういうことがあったので、この買い物支援をやっていきたいと言ったときに、「1名でも利用したいという人がいれば、私たちひかり工芸舎にやらせてください。」というお話がありました。理由を聞いたら、企業の箱をつくったりできる利用者さんは、月に15,000円くらいの給料をいただけるんだけども、それ以上の重度の方には仕事がこない。しかもコロナ禍があったりして、外に出られないという中で、やはり外に出たい、何か自分もしたいという声が非常に強いので、ぜひうちにやらしてくださいと。社会福祉法人は何か地域で広域的なことをしなさいという方針もあって、利用者は1人でも、月に1,2回だけはその作業を、お仕事としてやっていただけるという形になりました。ひかり工芸舎の職員が運転をして、それにひかり工芸舎の利用者さんが2人乗って、一緒にスーパーに買い物に行くわけです。探すのが大変だから職員がどこにどんな商品があるというのを全部スマホで撮って。そこに行くだけでもその利用者さんは楽しいらしいです。外に出て、おまけにそれをお届けしたら、依頼者から

「ありがとうね」と言われて、配達料を1回300円いただけます。それに社協から200円補助があるので、1回行けば500円です。その500円っていうお金をいただくのが、本人たちは非常にありがたいし、嬉しい。だから「次は私たちが行きます」と言って、本人たちが、楽しみにしてるという状況で回ってます。それが今でも続いている、5件ぐらいまでは何とか引き受けられるんですけど、10件になると本来の業務に影響が出ますので、足りないところは地域の方でやろうということにしていますが、今のところ3件から多いときで4件ぐらいになっております。中には、自分も何らかの形で障害者の支援をしたいということでやられてる方もおられます。私どもの地域は斜面が多いところですので、要支援1まではいかないけど足が悪いという方達からは、買い物支援の要望があります。実際に一緒に行ったりすると本当に喜ばれます。ただ、大型の冷蔵庫は公民館にも障害の施設にもないので、生成食品のような腐るものは駄目です。重たいものをお運びしますという形で、配送料は各スーパーが大体300円から400円ぐらいらしいので、300円ぐらいで落ち着こうという話になりました。

近所にあるスーパーにもお願いしたのですが、「1ヶ月に1回それをするのは、手間がかかるからうちは遠慮させてくれ。自分たちに遠慮せずにやっていいですよ。」ということで、スーパー2つぐらいあったんですけど、断られました。たしかに迷惑だと思うんですね。ほんのわずかなものを買い物に行くのに、わざわざ小倉まで行くということもあるようでした。それで、校区にスーパーやドラックストアなどが3つありますので、それを指定という形にしてやっています。そういうつながりで、夏祭りや小東まつり、敬老会などにお見えになったりとか、その受け入れをしたりという形で、既存団体だけでやってたようなまちから、障害のある方たちも含めたまちになってきてるんじゃないかなというふうな思いました。

よく思うのは、例えば高齢化率が高いことがいかにも悪いかのような印象で言われるんですけど、自分は高齢化率が高い地域っていうのは、長く健康でそこに住んでおられるという視点から見ています。小森江東校区は非常に眺めがいいところですよ、いいところなんですよっていうふうにプラス的な方のPRをしていきたいです。確かに、若い人はどんどんマンションに入ったりして、少子化傾向にあるのは今後の課題だと思います。あとは担い手については、またいろんなところから出ますので、そこでお話ししたいと思ってますが、いずれにしても、僕らがやって楽しいという顔をして、楽しいという雰囲気にならないと、絶対ボランティアさんは入ってこないと思うんですね。だから必要なコミュニケーションと、ときには飲みニケーションを入れるとか。若い方はあまり飲みニケーション好きじゃないんですけど、年寄りは飲みニケーションがなかったら来なくなりますね。そういうところをいろいろ工夫しながら、要是、福祉の問題を楽しくやっていくというのが大事じゃないかなと思います。

【坂本構成員】

B e W i t h は誰もが自分らしく生きられる社会を目指して活動をしています。

私たちは、小倉北区金田にあるテナントの1階を借りて活動しています。母体となる活動として、私が民間学童クラブを運営してまして、その隣で、N P O 法人として、ラーニングスペースキャンドルという、学びの場という意味のキャンドルという場所の運営をしています。

キャンドルという場所を使って、居場所を大事にしようという大きな活動が2つあります。

1つは、学生が無料で使えるスペースで、学習したり、交流したりというスペースを開放しています。平日の10時から夜の7時まで毎日開放しています。ここは中学生以上の学生は誰でも来れて、大人の方にも使っていただけます。大人の方には、利用料といった形で、1時間500円、2時間以上は1,000円かかります。コワーキングスペースのような過ごし方をしていただけるように、Wi-Fiがあったり、飲み物があったりという形です。このような大人の利用で、地域の若者とか、これから頑張ろうとしてる学生たちの支援をして、循環できるような取り組みをしていこうという形で運営をしています。

もう1つは、やっぱりただ来ていよいよって言ってるだけではコミュニケーションがばらばらで、そこで会話をするとか交流するっていうところまでは繋がりにくいので、学生とか、20代30代の若者と地域の大人の方、シニアの方が誰でも来れるコミュニティ食堂、縁日食堂を月に1回開催しています。食事を作るのも、大学生がメインで作ってくれて、私がサポートしたり、食を囲みながら、ただテーマなく話をしたり、わいわいご飯を食べることって楽しいよねっていうところから、若者の孤独、孤食を防ぐとともに、いろんな世代の交流をして、いろんなコミュニティを持つてる人たちとも話をすることで、多様な価値観に触れて、社会とのつながりを感じて欲しいなっていうことで、縁日食堂を基本的には毎月9日に開催しています。写真を見ていただきたいんですが、一部のスペースがラーニングスペースキャンドルということで、学生が無料で使える第3の居場所になっています。端っここのところは、学生が自習しに来ていい場所ということで、高校生や中学生が試験前に来たり、大人の方が利用したりで、地域の優しさがつながる居場所という形でやっています。

あと私自身が、学生とかとキャリアの相談をすることも増えてきたので、キャリアコンサルタントっていう資格を取って、それを生かしながら、大学生が就職活動しようというときに、進路相談受けたり、自分でどういうところがいいところなんでしょうか、エントリーシートにどう書いたらいいんでしょうか、という相談もったりするので、持ち味カードっていうのを作って、自分のいいところを発見しようということをやっています。

あとは、BeWith主催ではないんですけども、この場所を使って子ども食堂を開催してもらっています。北九州市立大学の421ラボの中にある子ども食堂ネットワークの学生たちが、自分たちでも子ども食堂をやってみたい、いつもボランティアで支援には行くんだけど、それももちろん大切な仕事だとは思うけど、自分たちで活動することで、ボランティアとして何が必要なのか、どういうところが大変なのかを学びたい、というお話を伺ったので、この場所を使ってやっていいですよということで、月に1回開催されていて、もう1年くらいになります。

あとは他の団体さんで、子ども食堂やりたいけどなかなか場所がないということで、この場所を使ってもらって、大体月2回されているので、月に3回ぐらいは子ども食堂がこの場所で開催されています。

もう1つが、世代を超えたあたたかい交流の場ということで縁日食堂を開催しています。食卓を囲んで、テーマなく、その日、その時期によっては、参加する人たちも結構違ったりするので、大学生もいれば高校生もいたり、20代前半で就職してすぐの人がいたりとか、50代60代の人がいて、会社の経理の人、偉い人もいて、話してたら社長さんだったとか、部長さ

んだったとか。就職とか仕事を絡めないからいろいろなことが聞けるっていうような、テーマのないコミュニティの形成をしています。その中で、大学生とどうしたらもっとこの居場所が楽しくなるかなっていうことでアイディア出しをしたんですよね。その時に大学生が「逆転 行列のできる相談所」っていうのをやつたらどうかということで、大学生が相談員、大人が相談するっていうの開催したんですけど、大学生が意外とスパッと答えるんですよね。大人が「仕事やめようと思ってるんだけどどうしよう」って、大学生に相談したら、「今の仕事なんですか」って聞かれて、「こうこうこうで」って説明してる中で、「本当にやめたいですか?」って突っ込まれて、「やめたいと思ってるんだけどね」って言ったら、「今、仕事の話されてるときの顔見たらめちゃくちゃ楽しそうでしたよ」って言われて、「じゃあもうちょっと頑張ります。」みたいなこともあります。大学生はすごく真剣に進路に悩む分、その仕事が何で嫌なのかっていうのが気になるみたいで、すごく真剣に話を聞いている。大人の方が勉強になりましたっていうことをしました。そういうことで、大学生も誰かの役に立つ、それが自分の力にもなって、大人もそんな考え方もあるよね、となって、お互いのつながりができるということで、この縁日食堂は2年半ぐらいやっています。興味のある方は誰でも来れますのでぜひご参加ください。

私がこの活動を始めたきっかけを話させてください。

まず1つは、息子が22歳で家を出て一人暮らしをしてるんですけど、高校を出て大学に行くか行かないかということですごく息子と揉めました。学校は進学をするのがメインの学校だったので、「就職のサポートはできない。就職先がないし、したことないのでとりあえず自分たちで好きにやってくれ」みたいな感じだったのでハローワークに行ったら、ハローワークは、「高校の新卒の支援には校長の推薦状などがないとできない」ということだったので、学校に言ったら、「自分たちはそのへんがよくわからないので、調べてもらっていいですか。」みたいな感じで言われたことがあります。そうなんだと思って、「もう大学行きなさいよ」と息子に言ったんですけど、息子は勉強もしたくないのに何百万も使うなんてもったいないでしょと揉めて、そんなときにたまたま共通の知り合いの若い男性に話をしたら、自分が話を聞こうということで、第3の大人がいてくれたことで、息子なりに進路を考えることができました。そのときに家族での話と学校と行政だけでは解決できないことがあるなと思って、高校生が進路で悩んだらどこに行けばいいんだろうってすごく悩んだんですね。若者で、何かやりたいけどわからないなっていう子たちってどこに行くんだろうっていうのを、このときに思ったのが初めてでした。

その同時期に、知り合いの息子さん、多分その当時なので20歳ぐらいだったと思うんですけど、優秀でスポーツもできて頭もよくてという息子さんが、大学で東京に出たんですけど、自死したということがあって。なんで?って聞いても親もわからなくて、本当急にそうなってしまったっていう。もちろん親御さんも悲しいし、私たちもその子をとてもよく知っていたのでとてもショックで、何で誰かに言えなかっただろうって、言ってくれなかっただろうっていうところで、ここで気づいたのが、見えにくい悩みをどうにかできないのかなと思うようになりました。一見普通に生きてるようでも、実はその人その人自分の悩み抱えていて、心の葛藤を誰かに聞いてもらうとか、つながる居場所が必要なんじゃないかなというふうに考える

ようになって、そういう場所、漠然とした不安とか、引きこもりでもない、障害を持っていない、学校にも行けているんだけど、そういった普通に見える、普通っていうのが適切な言い方かどうかちょっと分からんんですけど、普通の生活ができている子が、悩んだときの相談場所がないというのをすごく感じました。そういう相談をしたときに、親だったらやっぱり、自分も経験があるんですけど、子どもにはこうなって欲しいなっていう期待感があるので、やっぱり子どもの素直な声を聞くというよりも、こうなったらいいんじゃないっていい方に誘導してしまうことがあるので、子どもの本当の気持ちが伝わりにくいのかなと。でもそういうときに伝える場所が本当は必要なんじゃないのかなということで、何か困ったときに行ける場所っていうのが必要だなと感じました。

これは統計なんですけど、悩みを抱えてる若者は3人に1人いるとかですね、進路の悩みが多かったり、人間関係に悩んだり、自己肯定感、自分でどうなんだろうって悩んだりっていうのが多いという統計ですね。実際、子どもたちの希望とか、自分で頑張れるぞとかいう意識っていうのが、居場所の数が多いほど、高くなるという調査もあります。こういうことから、私たちは安心できる場所を作りたいということで、義務教育までは中学校までは何となく守られている子どもたちですけれども、急に高校生になったら、もう大人でしょ、自分で決めるでしょう、わかるでしょうみたいに、どんどん進路が先に進んでいってしまうので、義務教育が終わった後でも安心できて誰かに相談できる場所があったらいいと思って、それは学校とか家以外であつたらもっといいよね、かといってカフェとかに行っても、自分たちでしゃべったりするだけなので、そうではなくて、地域との関わりができるような、自分らしく生きられるような場所、これは大人がるべき仕事かなって思って、大人が柔らかい土壤をつくることで暖かな芽が生まれるんじゃないかなということで、安心できる場所をつくっていこうということでやっています。

この場所をつくって実際にあったことなんんですけど、ここが勉強する場所なので、近くの中学校の子が、ずっと3年間来てくれていて、試験前とか勉強に来ていって、いつも朗らかで、部活はバスケやってます、勉強も頑張ってますってとても明るく話しかけてくれる女の子がいました。この子がですね、2月になる前くらいに、入ってきた瞬間に荷物を置いてぶわーっと泣き出しがあって、どうしたのって聞いたら、「もうすぐ受験するんだけど、この受験先が親の地元で、ちょっと離れた場所で、でもそこに行って欲しいと親はすごく思っている。先生も国立大学だから絶対にいけるよって。友達もみんな成績が伸びて自分で何もできないのでとても焦ってるんだけど、自分が本当に焦ってる気持ちっていうのは、親が思う大学ではないところに行きたい」っていう気持ちをすごく抱えてたいということで、「私立の大学に受かってるけど親には言えない。私立のお金も高いし、そこだと寮に入らなきゃいけないし、3人きょうだいの真ん中で、両方まだお金がかかるのに自分がそんなわがまま言えるわけがない」って言って、「でも親が言う大学に行きたいわけではない」っていうことでもうどうしていいかわからなくなって、もうわんわん泣いて、半日ぐらい過ごしてたんですけども、そこで話を聞いて、「私も子どもがいるけど、子どもにこんなに真剣に言われたら親はあなたの話を聞いてあなたのこと応援したくなると思うから、話してみてごらん」というようなことがあります。

た。その子は結果的にちゃんと試験も合格して、親にもちゃんと話せて、今は自分が行きたいと思っている私立大学に行けるようになったっていうようなこともありました。

こういうこともあったので、居場所というのがとても大事だなと感じるようになりました。居場所があるだけではなくて、そこに信頼できる人がいて、そこで安心して過ごせて、そこでありのままでいいんだよという自信があって、そうすると、新しいことにチャレンジしようと思えて、より自分らしく、充実した人生を送れるようになるんじゃないかと考えています。ただ居場所があるだけではなくて、会話をしたり、つながりが実感できたりするような、社会になつていったらいいなと感じます。

最終的には居場所の力で、若者が安心できる場をつくりたいんだけども、これは若者だけでも私達だけでもできることではないです。BeWithとしては、4年前にNPO法人になりましたが、その前から「場」というのは7年ぐらいずっとやってきています。「場」を提供しながら、地域の皆さんやいろんな活動をしてる方たち、若者がもっと必要だっていう方たちとつながって、一緒に活動すると、若者にとっても自分がここで役に立つんだとか、誰かと一緒にいることの心地よさっていうのを感じてもらえる。地域の皆さんと集まりながら、この地域が自分が安心できる場所なんだなって、この場所に留まろうかなとか、何かあってもここに帰ってきたいなっていう地域になればいいなと思って活動しています。

【遠山構成員】

一般社団法人生き方のデザイン研究所っていうのは、インクルーシブデザイン思考で社会を変えるNPOです。一般社団法人なんですけど非営利型の一般社団として活動をしています。

私は代表理事なんですけど、なんちゃって社長ということで、コーディネーターでバタバタやっているところですが、自分らしく生きるっていうことをとても大事に思っています。ただそのときに、自分さえよければっていうことじゃなくって、地球も社会も周囲の人もみんながハッピーな生き方ができないかっていうことを、日々研究しようということで「研究所」なんです。

いろんなところでファシリテーションをさせていただいたりすることもあるんですが、先ほど皆さんお話をきながら、若者支援っていうと未来マップとか、高齢者の方だと生きがいマップとかのお話をさせていただくこともありますし、最近では毎日新聞の支援をいただいて、小学生の傾聴、傾聴ってすごく難しい漢字が当てられてますけど、私たちは「ケイチョー」って言って、カタカナであえてケイチョーって書いて、すごく身近な風に傾聴を伝えるアンバサダーとしての活動もしています。

最近で言うと、看取りファシリテーターとしての活動もしています。看取り士です私は。北九州ですごく自慢したいのは、全国で唯一全盲の看取り士が北九州にはいるんです。一緒に勉強して看取り士の活動も始めたところです。生き方のデザイン研究所のマークは、オレンジと緑に見える方が多いと思うんですが、最近の研究では人間は同じ色を見ることができないということがわかってきていて、緑とオレンジには見えていらっしゃらない方がいても気にしないでください。要は、赤といつても黒っぽい赤と白っぽい赤もあるっていうことで、視覚障害の方がヘルパーさんと買い物に行って、かわいい赤い服だと教えてもらって買ったのに、家に帰

ったら「どうしたんそんな黒い服着て」とかって言われて、自分が思ってるのとイメージが違うってよく言われるんですけど、やっぱ皆見え方が違うっていうことですね。

何が大事かっていうと、自分とは異なるいろいろ人と会って、タッグを決めるぐらい仲良くなしようということです。このマークの2人は仲良しなんですが見つめ合っておりませんで、何といっても、肩を並べて同じ目的に向かって歩み続ける仲間同士です。私たちは障害のある人たちにサービスを提供するっていうことはあんまり考えていない。ともに仲間として、この地域を一緒につくっていこうということを大事にしているのですが、その時に「居場所」と

「役割」と「つながり」っていう3つのキーワードを大事にしています。これは、誰もが最後の日が来るんですけど、その瞬間に「生きててよかったね、幸せな人生だったね」って思えることの幸せって言うんですかね。その瞬間に「あれしておけばよかった、これしておけばよかった」って思っても間に合わないので、私たちは元気なときに、みんなが居場所と役割とつながりを感じられる活動をしていきたい。脳科学の先生から教えてもらったんですけど、愛情とつながりを感じられるとオキシトシンが出てくるし、居場所は安心感のセロトニンが出てくるし、誰か役に立つよって言わされたらドーパミンが出てくるってことで、こういう幸せを感じるためのホルモンとも連携しているとのことです。

2013年に活動を始めました。日本工業大学さんの大学院の中で、障害のあるメンバーと日々、集まっていることをしています。200人近い方が、オープニングセレモニーに来ていただいたんですが、たくさんの方に集まっていたので、本当に期待を持って応援をしていただいているんだなあということを感じました。いろんな人がいますが、子どもたちももう10年近く経って大きくなって、いろんな形でサポート役に回ってきてくれているところです。

最近では八幡東区の田代町というところに、築180年ぐらいの古民家を会員の方からお借りして、春には味噌づくり、秋にはお月見団子会をやっているんですけど、残念ながらその古民家からは月が絶対見えない角度ですよ。ですから、目が見えないメンバーが多いので、心の目で見ようっていうことで、お団子を食べることを中心に活動をしています。

不動産会社の人がいたり、学生がいたり、いろんなNPOの職員が来たり、いろんな方たちと支え合って活動をしているところですね。合い言葉は「カオスでペ」。非常にごちゃごちゃしているわけです私たち。常にごちゃごちゃしてるんですけど、こういうごちゃごちゃした中で、「ペ」ってフランス語の平和っていう言葉らしいんですが、ごちゃごちゃすることの中から平和を見つけるとか、ごちゃごちゃしてるからこそ平和が感じられるみたいなことを目指していきたいっていうことで、障害があることを強みに変えられる活動にチャレンジしているところです。なぜこう思うかっていうと、一人一人が大切にされることの大切さとか、誰1人取り残さないというキャッチコピーを最近よく聞くんですけど、これって本当にできるのかっていうか、本当に目指そうとしてるのかって、疑問に感じるんですよね。実際のところ、色々な人がいて、一人一人が大事にされようとすると、誰かの権利が侵害されることが起こるわけです。権利と権利はぶつかり合うものっていうことを前提にすると、私は幸せでいたいときに誰かが幸せじゃなくなるかもしれないっていうのは、ちょっと残念なんだけれども、折り合いをつけるとか、対話を重ねて、話し合いをしながら、どうすればいいかなっていうことを一緒に考えていくことの必要性を感じています。

これだけ人がごちゃごちゃいると、小さい団体ですし、狭い場所にいますので、あの人が好かん、この人が好かんって言うんですね。だけどみんな、何かしら話し合ってというか、折り合いをつけて集まり続ける。来なくなるって人いないんですよね。好かんなら来なければいいのに思ったりするけど、やっぱそれはないということで、やっぱり少しづつみんな距離を保ちながら、自分の居心地の良さは自分でつくるという約束の中で活動をしています。

最後に、私たちの目指す理想の社会についてです。たまたま私たちは障害のある人たちと一緒に活動しているので、まずはこの障害のある人が活躍する社会。そうすると多様性が理解されるようになる、そうすると多様な役割がつくられ、多様な人がさらに積極的に社会参加できるようになって、障害のある人がまた更に活躍できるようになるという循環、スパイラルアップしていこうというふうに考えてるんですが、現実問題は、障害があることで、外出がまだできないっていう人がいるわけで、そうすると社会参加ができない、社会参加できないと多様な人と出会えない。これは障害のある人の視点だけじゃなくて、障害のない人たちが多様な人の出会いの機会を奪われてるっていうふうに考えられるんですね。

いろんなどこでお話しさせていただく中で、市民カレッジというどこでお話させていただいたときには、70代の方が「70年以上自分はこうしていろんな勉強してきた。だけど、障害のある人と一緒にこのテーブルに座って遊んだという経験は70年間で1度もなかった。一緒に勉強したっていう経験もなかったんだ。」っていうふうに言ってくださいました。大学生からも、「自分も学生時代、障害のある人と一緒に遊んだ経験は実はありませんでした。」って言されました。

一方で、地域でいろんな話をすると、「幸いにしてうちの地域には障害者はいません。」と言って、地域の代表の方が補聴器をつけて杖をついてやって来られる。障害って本当なんだろうとか、私たちにとって、地域とか福祉とかっていうのを考えた時に、なんか遠いっていう感覚があるんですね。コミュニケーションの難しさもあるんだろうけれども、遠いなっていうのが私たちも感じているそれこそ肌感覚ですね。

ここから私の仲間の話を少しさせていただくと、職員がちょっとバタバタしたり、ボランティアの皆さんのがバタバタしたりすると、「忙しいっていいねえ」っていうんですね。「忙しい楽しい」って。仕事したい、誰かの役に立ちたいってみんな思ってるけど、自分たちは何もできないというように扱われてしまう。市民センターの館長研修なんかさせていただいても、市民センターの職員とか館長に障害者いますかと聞くと、「もしかしたらいろんな病気の方も経験されてる方もいるかもしれないけど、車椅子の館長はいないね、目が見えない館長とかいないね」っていう感じですよね。やっぱ地域で世話される人っていうふうに決めつけられてるのかもしれないし、正直人材不足って言ってる中で、何か役を担える障害のある人もいるんじゃないかと思うので、そうした活用の目でも障害のある人を見てもらえると嬉しいです。

これは障害のあるお子さんのいらっしゃるお母さんからの声だったんですが、「最近では、市民センターでも地域でも、「いいよいいよ、お子さん連れておいで、どんなに障害が重たくてもいいからおいで」って言ってくれるので参加したいけど、行ってみたらやっぱり、うちの子は、歩ける子とかしゃべれる子と一緒に遊べないよね。いいよって言ってくれるのは嬉しいんだけど、参加したいけど、一緒にまざって、同じことしたいわけじゃないんだよね。」

っていう言葉を聞いたときに、北九州市に夢のごちゃごちゃハウスっていうのをつくりたいと思いました。ごちゃごちゃなんだって言ってきた意味、やっぱりごちゃませられたくない。ごちゃごちゃでいいんだ。ごちゃごちゃした中で一人一人が大事にされて、誰かとまざるわけじゃないんだなっていうことを、このお母さんの声から感じました。

もう1つは、相談するぐらいなら死んだ方がマシとかいう人がいるんですよ。なんていうことを言うんだ、と思うけど。なので、皆さんが事例たくさん教えてくださいましたけど、何でもないところで何でもない話ができるということがいいのかなあと思っているので、企画物のサロンもたくさんしてるんですけども、日々、なんでもないサロンというのをやっていて、何をしゃべってもいいし、何してもいいしっていう中で、お互い助け合う雰囲気を醸成してるかなと思います。

夜中の話をいくつかさせていただくと、障害のある方は一人暮らしの方が割と多いですね。

ある人から、夜寝ようと思って電気を消そうとしたら、ひもが切れてしまって、電気が明るいままで寝られなくなつたって言うんですよ。20時、21時くらいだったんですけど、うちのスタッフが、ひもを買って自転車で20分くらいかけて駆けつけました。そしてひもを付けていただいたんですけど、正直その時それぐらいのことって隣の人には頼めないのかなって思ったんですよ。市営住宅の方だったので。

もう1つは、22時半ぐらいに冷蔵庫が閉まらなくなつたって電話がかかったきたんですよ。食べ物の腐敗の問題とかもあるので電気よりもちょっと深刻で、それで車で走っていったら、単純に何か引っかかってただけですよね。だけど、目が見えないからそれが探せない、手が不自由だからそれが取れないっていうことで、それも私たちが行くわけです。

もう究極なのはですね、泣きながら電話かかってきた人がいるんですけど、蛇口が落ちたつて言ってきました。もう意味がわからなくて、とにかく写真送ってと言ったら、シンプルに蛇口が落ちていて、さすがに水回りはちょっと無理かなと思ったけど、応急処置で工具持つて行って、とりあえずつけて、水が漏れてなかつたので、もう絶対これ次の日は業者さん呼んでねっていうお願ひをして、そんなことをさせていただいてるんですけど。それこそ、近所の人でできないのかなって思うんですよ。でも、正直私たちみんなで話し合ったときに、私が夜隣の人を起こして22時ぐらいにちょっと電気消してもらえませんかってできるかなあと思ったときに、言えないなあと思ったんですよね。でも私だったら、1日ぐらい電気点いててもうしようがないかと思って寝るかなあと思つたり、冷蔵庫どうするかなんてみんなで真剣に考えたりしたけど、誰に頼むか、誰に頼めるかっていう先を持っているか持つてないかって違うんだなって感じました。

防災に関しても、どうせ助からないから、自分たちのことはほっとってくれっていう方が非常に私たちの仲間には多いです。車で逃げられないしっていうのはわかるし、私たちの事務所は7階にあるので、車椅子どうしようか、もう体の一部だからできたら一緒に逃げたいけど、でもまずは命だねって言って、とにかくおぶってでも抱っこしてでも降りようと言って、逃げる体制みたいなシミュレーションもよくするんですけど、とにかくみんなで助かろうっていうことを常々語り合っております。

普通でいたいただけなのについていうニーズだったり、居場所だったり、ほかに行くところはないのとかとか、ちょっと失礼なこと言う人がいたりするんですけど、正直居場所っていうことでいうと抱樸さんがいらっしゃるので、私も全国でいろんな活動する中で、北九州から来ましたって言ったら、「抱樸さんですね！」って必ず言われるんですよ。「居場所があるからいいですね」って言われるんですよ。だけど、先ほどの皆さんのお話の中にあったように、居場所っていういっぱいあっていいわけですよね。いくつもあっていいと思うし、それぞれが自分の居場所っていうのを感じられるものもあったらいいと思ってるので、「北九州ですけどもっともっと居場所あります！」というふうにPRをします。自分たちだけの居場所みたいなもの、そして、他のところに自由に行けるような。自分の居場所はここだからって決められて、ここから動けないっていうことじゃなくってあちこち行かれるっていうことが大事かなと思う中で、実は小規模共同作業所っていうのを、北九州市からさんからの補助金事業として私たちは運営させていただいております。これ組合の事業じゃないので、障害者のサービスではないんですね。正式なサービスではないということで、正直財政が苦しい中で、国がやってないことわざで市がする必要ないんじやないかっていう声もあるかもしれないんですけど、これがあるからこそ、いちいち制度上の審査が必要でなかつたりとか、役所を通さなくてもよかつたりとか、要はすきまの部分を拾うことができる事業ではないかというふうに思っています。

こういった活動も大事にしながら、最後ぐらい自分らしくいさせてっていうことで、昨年度ですね非常に暑かった中で、私たちは2人の仲間を突然、熱中症で亡くすことになりました。第一報が私の方に入って、警察からも連絡が入り、看取らせていただくんですけど、もともとこうやって看取りの活動をボランティアでやってきました。でも、やっぱり昨年をきっかけに、もう少しちゃんと勉強しようということで看取り士の資格も取らせてもらって、お仕事ではなく、ボランタリーに、最後の時をみなさんと一緒に、本当にその人がその人らしく最後を迎えるように、サポートしていけたらいいかなと思っています。

ある視覚障害の方が、余命宣告を受けまして、膀胱がんでした。その時、お医者さんの説明に私も同席させてもらったんですけど、「おしっこの色見たらもうちょっと早く気づけたはずでしょ」とお医者さんから言われました。でも目が見えない人なんですよ。自分で早期に発見できなかった。自立した方のトイレ介助とかしないから、おしっこの色とか私たちも見ることができずに、看取ったんですけど、24時間体制でボランタリーに会員の皆さんと一緒に、その方の最後を見取ることになりました。その時に、医療との連携って言うけど、そしてお医者さんは命を助けることが仕事かもしれないけれど、その人の生き方をもう少しご理解してもらえるとうれしかったかなと思って、長い手紙を書いて送りました。

最後に、私たちは支援されたり、支援したりしたくないっていう声を大事にしていきたいと思っています。自分の居心地の良さは自分でつくるっていうことで、ごちゃまぜじゃなくてごちゃごちゃなんですっていうことからですね、何と、ようやく居場所が少し決まりそうで、夢のごちゃごちゃハウス、先ほどから言われてるさりげなくそばにいて、頼ってもいい人がふらっと出てくるとか、自由と安心が自分らしくとかって、いろんなことを書いてますけど、そういった、安心な場所を私たちもこれから北九州市につくっていこうと思っています。ぜひ応援をよろしくお願ひします。

【大久保構成員】

打ち合わせのときに、地域に入れなかった失敗談を話すと、それがいいと言われたので、不発談を話そうと思います。好きなことは木工です。以前イギリスの障害者施設に2年間くらい居て、そこで木工を習って好きになりました。

NPO法人K I D ‘s w o r k で子どもの体験活動や野外活動をやっています。それとともに、来てくれている子どもがリーダーになっていくことがあるので、そこも一緒にやっています。最近割合的にはリーダー育成の方に興味があるので、子どもの活動をおろそかにしているわけではないんですけど、リーダー育成に力を入れています。子どもの活動では、遊びが仕事、仕事が遊びというところで、子どもの仕事は遊びだろうっていうところと、大人の仕事少し変化させて、生活の中でのっていうところなんですけど、それをプログラムにしています。そういう体験活動を通じて、子どもたちの考える力、決める力、行動する力につけて欲しいなというところでやっています。

具体的な活動はですね、今年の夏は防災キャンプをやりました。ちっちゃい規模ですが、あるキャンと言つて、北九州市内を50キロキャンプしながら2泊3日で歩くということをしました。5年目なので、今年は小倉城から皿倉山、皿倉山から玄海青年の家、玄海青年の家からまた小倉城へ戻るというのを2泊3日でやりました。

今やってるのが、にわとりキャンプといって、にわとりを捌いて食べるということをやっています。これは、構成メンバーの大学生が発案して、3年前に1回やったやつを今年もう1回やろうということで、やりました。

研修会で石焼き場づくりもしました。リーダーが結構いるので、人生で1回しかやらない体験をやろう、石焼とか作ったことないだろうと言って。これ南太平洋の地域とかでやってるような調理方法で、それを庭につくるとか、あとは、うちの軽トラをみんなで塗るとかそういうことをしています。

～あるキャンの動画～

今のは団体の中での活動ですが、最近は体験活動をコーディネートするということで、地域に入っている人と子どもに対する体験活動をつくるみたいなことをやっています。市の予算は切れてしまつたんですけど、2021年から2023年まで、市民センターで子どもの活動をつくるということで、市民センターにも呼んでいただいて、地域の子どものプログラムを、地域のまち協の人たちにも協力してもらいながらつくるということをしました。

きよみマーケットをつくる活動は面白くて、前年度に「お地蔵さんの謎を解け」といって、地域の人がお地蔵さんを探したり絵を書いたり、お地蔵さんをつくったりするイベントをしたんですけど、その活動の際に地域の社協の会長さんが悩みごとみたいな話で、朝市を毎月1回やってますと。10年前に買い物難民っていうので朝市を始めたんだけど、10年経つて、朝市をやってる人も高齢になって、誰も来なくなつてちょっとやばいみたいな話をしてたので、いろいろ話を聞いて、「じゃあそれ子どもに仕掛けを聞いてみましょうよ、子どもの事業にそのまましましょうよ」って言って。それで朝市を子どもに見てもらって、会長さんから「朝市を盛り上げて欲しい」というメッセージをもらったので、盛り上げるってどういうことを子どもたちに聞いて、考えてもらった結果、「僕たちが店を出すことが盛り上がるという

ことだ」と言ってくれたので、じゃあ店を出そうかとなりました。どんな店出すか、どういうふうな店を作るかってチームに分かれてもらって、途中でポップを書く人とかに来てもらってポップを書く練習をして店を出すわけですね。ちょうど朝市の120回記念の時に子どもの出店をするっていう、仕掛けをして実施しました。これは結構面白くて、地域課題に子どもが遊びながら関わるということができました。

もう1個ですね、これは小倉南区の吉田校区なんですけど、にれの木坂団地交通安全ということで、にれの木坂団地って結構新しい団地なんんですけど、真ん中に走ってる道路がちょうど朝の抜け道になるので危ない。地域の方はいつも横断歩道に立ってくれるんですけど、みんな横断歩道を渡る人ばかりではないので、新しい横断歩道をつけて欲しいという地域からの要望が警察にいくんですね。警察に行っても、要件があつて横断歩道つけられないみたいな話になって、地域は怒るわけですよ。なんでつけられないのかと、要件とのはざまで会議が紛糾したところで、誰かが子どものことだから子どもにもちょっと話聞いてみようとなって自分が呼ばれたんですけど、交通安全とかしたことないのに。話を聞いて、小倉南区のコミュニティ支援課とまちづくり整備課とも話して、道路標表示として何か道路に絵を書くぐらいでは頑張ってやりますと言ってくれたので、それやりましょうとなって。交通安全って何かっていうのを警察の方に話してもらって、にれの木坂で子どもが危ないと思ったところと、ここ危ないよねっていうところを警察と一緒に見てもらって、それでマップをつくって、そのマップの中で、道路にどんな絵を描いたらいいだろうということを子どもたちに考えてもらって、市民センターの中庭にチョークで絵を描くというのをやってもらいました。一旦講座はここで終わりなんんですけど、大人の仕事はそれからですね。じゃあその絵を本当に描けるかという話で、まちづくり整備課の職員がこの絵だったらいいけるかもとなったので、データをすぐ作って持っていたら、できそうだということで、それが実際ににれの木坂の入り口の道路に2か所設置されることになりました。

設置の際も、土曜日に施工をしてもらって、子どもたちが市民センターの行事として見れるようにしてもらいました。交通安全って誰かが見えないとこで働いてくれてるからできるんだっていうのを子どもに知ってもらう、警察の役割だったりまちづくり整備課の役割だったり、交通安全を守る人たちがたくさんいるんだっていうところを、子どもたちに感じてもらうようなことしました。

あとは子ども若者成育課と一緒に、地域の公園を使って、プレーパークといって、子どもが自分の責任で自由に遊ぶ場所を展開しています。地域に受け手の方がいらっしゃるところを開拓していくんですけど、そこで子育て中のママの団体だったり、地域のまち協だったり、受け手がいて、その受け手にこういったものをつくったらと、伴走支援、立ち上げの支援をしていて、2年目3年目みたいに振り替えながら活動しているっていう。

牛のスタンプをつくるのも仕事なんですけど、夜中に牛のスタンプをつくっていると、子どもから「なんしよるん?」って、「牛のスタンプつくりよる。これ仕事やけ。」って言うと、子どもは、「お父さんの仕事は説明しにくい。お父さんの仕事なに?って友達に聞かれて、3つ言うと分からん顔される。5つ聞いてくれる人はいい友達。」と、お父さんの仕事はよくわからないと言います。

地域と一緒ににかをするといつても、不発談がたくさんあります。

ある地域から、「子どもの活動として年末の餅つきと、年配の方へのお餅配りというのがウェルクラブの活動としてすごくいいんだ、これは盛り上がっている。でも、ウェルクラブとしては子どもがあんまり集まってないから何か求心力のある活動を」みたいなご依頼がありました。いろいろ話を聞きながら考えたのは、その地域はちょっと都心部だったので、自然環境が少なくて体験活動が少ないので、小倉南区の合馬とかその辺とコラボして、田植えの事業とかを向こうに持ってもらって、都市部と農村部の交流事業を持ちながら稻を育てる、育てる土地に遊びに行く、稻刈りをする、刈った稻をつく、ついた米を配る、こういうことをすると、結構いいんじゃないかな、我ながらいいぞとなって地域の人々に伝えると、一部は盛り上がるんですけど、地域全体の同意が得られなくて不発。

また別の地域では、公園の清掃活動を毎年1回秋にやっていて、結構広い公園で葉っぱを結構集めるんですけど、それをビニール袋に入れて捨てるわけですよ。「もったいないね、あれで焼き芋したいね」ってずっと言っていて。さっきのプレーパーク事業は市の共催ですから火起こしも大丈夫なので、「できるんじゃないですかね？相談に行きましょうか、自分も一緒に行きますよ」と言っていたんですよ。そしたらまち協の会長も「いいね、それやろう。俺ちょっと先に聞いてくるわ」ってまちづくり整備課に行ったんですけど、会長がすぐに帰ってきて「ダメやった。けんもほろろやったよ。」みたいな感じで不発になってしまいます。

地域と一緒に何かするときに、僕らのやり方としては、事業を1個持って行って、事業をハブとしてくっついていくということがあります。新しいことを何か起こさないと、新しいつながりとか、つながりを変えるっていうのはなかなかできない。既存の中だけでは難しい。でもやっぱり新しいことには抵抗があるので、既存の事業に新しい要素を少し加えていく、抵抗がない程度に加えていく、まあ抵抗は少しあるんですけどね。その新しい要素っていうのは困りごとや、その課題解決につながるイメージを持ったものを付け加えていきたいなど。既存の事業というのは地域にもともとあるものですからそれを活かして、リソースは有限なので、あいつから金持ってこいとか、あの企業とつながったらいいとか、そうやってないものねだりをせずに、あるものを組み合わせを変えたり見方を変えたりして、課題もリソースだみたいなイメージなんんですけど、そういう部分もある。

でもどうしても阻害要因があって、さっきの行政の縛りとか、ある一定の力の人たちとかが阻害になっていて、そういうとこは必ずあるんですけど、もうちょっと調整がいるんですね。本当はもうちょっと丁寧に調整しないとできない。そういうことなんんですけど、それでもやっぱり阻害要因となるのは人なんだと思っていて、人が持ってる性質としては、新しいものに対する抵抗感とか、世代間で価値観が変わっていて、そういうところをやっぱり考えていいかといけないなというところと、実施するときに自分がしないといけないとみたいな負担感と、あとはやったはいいけど誰も見てない、誰も褒めてないみたいな、それ駄目だろみたいなのはあるんですけど。

でも始める際には、不安というのは必ずあって、それは0になることはない。全く不安がなくてやるってことはないと思うんですよ。だけどこのバランスですね、51対49、ごまかし

みたいなんですけど、50対50じゃなくて、少し期待が不安を上回るようなイメージを持つてもらうと、地域は少し前に進めるのかなと思います。

そのために地域の人に話を聞き出して、地域の状況を聞いたり、地域の課題も含めた歴史だったり特徴だったりリソースを聞いて、その関係がどうなのかとか、その人たちと僕らもいい関係を作っていく。地域の特色を活かしたプログラムを、事業として1個地域に落としていく中で、それをどう運営していくか。

先ほどの社会福祉施設の買い物の支援の話はすごく面白くて、ただ買い物支援をするんじゃなくて、それをどのようにやるかっていう仕掛けづくり仕組みづくりっていうのは、やっぱり僕らも見習うべきだなと思って、そんな事例がたくさんあると、それここに当てはまるかもしれないとか、そういうことはすごい思います。

新しいものがないとできないんじゃなくて、あるものをうまく使ったやりくり上手が多分これからは必要なんだろうなと思います。負担は必ずあるんだけど、それも少なく見えるというか、期待の方が上回って、負担よりも期待が大きくなるような仕掛け、多分それ今言った通り、楽しくやるとか面白くやる、乗せ上手になるみたいな。すみません、2つの事例に全然乗せ上手じゃないんですけど、そういう失敗もたくさんありながら、頑張っているというところです。

【平野オブザーバー】

ご存じの方も多いかと思いますが、北九州市社会福祉協議会は社会福祉法に基づいて、本市の地域福祉の向上を目的に昭和40年から発足した民間の福祉活動団体です。今年度は、たまたまですが発足60周年を迎えました。市内の155の校（地）区社協の皆さんとボランティアさん、それから社会福祉施設等の関係機関・団体の皆さんと地域福祉を推進しています。

主な事業としては、校（地）区社協の皆さんと取り組むふれあいネットワーク活動を初めとした小地域福祉活動、それから送迎とか災害支援とかのボランティア・市民活動。それから認知症などで、日常生活上の不安のある方の金銭管理等を行う地域福祉権利擁護事業や、法人後見事業などがあります。その他としては、北九州市からの委託事業として、生活困窮者自立相談支援事業や重層的支援体制整備事業など、各種相談支援事業を行っております。

本日はこの行政の地域福祉計画の策定懇話会にオブザーバーとして参加させていただいております。ありがとうございます。一方、北九州市社協の方でも、民間の立場から地域福祉を推進するために、関係機関団体の皆さんに呼びかけて、地域福祉活動計画を策定・推進しています。こちらは活動計画っていう「活動」っていうのが入ります。

この活動計画の方は、約30年前、平成6年から取り組みを始めさせていただいてまして、現行の活動計画は、第6次計画となります。今年度が最終年に当たるので、来年度からの計画の7次計画を策定しているところです。

策定にあたってはですね、北九州市社協に総合企画委員会っていうのがあります、そこで協議させていただいております。民間の活動計画を議論していくために、社会福祉施設の皆さんやボランティア・NPO団体の皆さんですね、それから区社協からの校区社協の活動者の方に集まっています、議論させていただいているところです。実は、学識経験者の枠で、村山構成員

も参加していただいてますし、行政とも連携を密にしていかないといけないので、保健福祉局の田津地域福祉推進課長にも、委員として参加していただいております。

社協が皆さんと策定している地域福祉活動計画は、今、総合企画委員会を今年度年2回行いまして、基本理念と基本目標のところが、皆さん方とお話し合いができたところです。内容はすべて紹介できませんので、方向性のイメージとして基本目標だけご紹介させていただくと、基本目標1が、「みんなが参加できる地域づくり」、基本目標2は、「誰も取り残さない地域づくり」、基本目標3は「オール北九州で取り組む地域づくり」ということで、この3つの目標を皆さん方と話し合っているところです。あと、地域共生社会とSDGsの実現も視野に入れて目標を立てております。現在目標実現のために具体的な取り組み、その目標の下に付く取り組みを考える作業を行っているところです。この地域福祉活動計画は、今年度末に完成目標ということで、今策定しているところですので、ご紹介しました。

課題感のところなんですかね、令和2年度の国勢調査では、1つの家族の構成人数が2.09だったそうです。今年ちょうど国勢調査をしていたので、この2.09がどうなるんだろうかっていうのは非常に個人的には関心があります。中間構成員から家族の力が弱まっているっていうような話があったかと思いますので、そことリンクするのかなと思ってます。

それから川崎構成員も民生委員の立場から、福祉協力員と見守り活動っていうような話を聞いていただきましたけれど、今日のお話に引きつけて課題感を個人的に申し上げると、今日の資料の中の校（地）区社協向けのアンケートで、最も力を入れている取り組みは何ですかって聞くと、見守り活動がトップで、しかも85%が見守り活動という結果が出ているそうです。僕もそれはそうだろうなと、そういうふうに思っております。一方、今日の前半で福祉協力員っていうのが、名前が何度か聞かれたかと思います。福祉協力員っていうのは、155ある校（地）区社会福祉協議会の皆さんの中で、地域住民の皆さんのがボランティアとして、福祉協力員になってもらって、そのボランティアの福祉協力員が、校区内で見守りが必要な方を定期的に見守るのが福祉協力員だと思っていただいたらいいと思います。その福祉協力員が重要なんだと僕らも思ってます。ただ先ほど言ったように家族の力がちょっと弱くなっているところを、福祉協力員とか民生委員だけですべて補うっていうのは考えていませんが、最初の発見とかは、民生委員とか福祉協力員とかのご近所の方のボランティアの活動が大事かなと思っています。

前半で結構福祉協力員がクローズアップされてきたので、ここは地域福祉計画の策定懇話会なんですかね、僕としては、皆さん方の力を借りて福祉協力員の力がアップできるように、みんなが支えあえるまちにするように、何かヒントとか力を借りたら、とてもいいなと思ってますので、どうぞよろしくお願いします。

【村山座長】

構成員の皆さんから一通り情報提供いただきました。ありがとうございました。非常に内容が濃かったです。興味深い内容それぞれお話し下さいて、大変勉強になりました。こんな機会めったにないんじゃないかな。北九州市内の様々な協議会、活動を実際にやっていらっしゃ

る方に報告いただけます。こんな機会めったにないですので感謝です。これから皆さんと、議論していくのが本当に楽しみになりました。よろしくお願いしたいと思います。

8 その他の

チラシ「いのちをつなぐネットワークを知っていますか？」について地域福祉推進課長より説明

9 問い合せ先 保健福祉局地域福祉推進課

電話番号 093-582-2060